

地域における親子の居場所とその特性について その2：居場所感による居場所の比較と利用形態

正会員 ○外石 広美*1 正会員 藪谷 祐介 *2
同 串田 優衣*3 同 高橋 沙綾 *4
準会員 有原 千尋*5 準会員 伊藤 野々香*5

子育て環境 居場所 地域
因子分析 居場所感 子育て

1 居場所感からみた居場所の特性

前稿(その1)で回答の多かった公園、商業施設、子育て支援施設、実家・親戚宅について、それらの特徴を明らかにするために、前稿(その1)で示した居場所を構成する3因子の因子得点の平均値を算出した(図1)。また居場所感尺度の項目別平均値を算出した(図2)。

公園は【濃密】因子の得点が特に低いことから周囲との濃密な関係性が築かれにくい場所だと考えられる。項目別に見ると、「自由に過ごせる」「気軽に入れる」が高く、「家から近い」も相対的に高い。このことから、他者との関わりが少なく自由に過ごすことのできる利便性の高い場所であることが分かる。

商業施設は【濃密】因子、【のびのび】因子の得点が同程度に低い。【刺激】因子は実家・親戚宅の次に高く、項目別に見ると「新しい発見がある」が相対的に高い。また、「子どもと共にあたたかく受け入れてくれる」「自由に過ごせる」「気軽に入れる」が高い値を示した。これらより、子どもと自由に過ごすことができ、なおかつ刺激を受けることのできる場所であると考えられる。

子育て支援施設は【のびのび】因子の得点が特に低く、【刺激】因子は実家・親戚宅の次に高い。項目別に見ると「子どもと共にあたたかく受け入れてくれる」「明るく和やかな雰囲気がある」「色々な活動ができる」「いろいろな人に接することが出来る」が相対的に高い。このことから子どもと共に入りやすいあたたかい雰囲気と、多様な出会いや活動がある場所だと考えられる。

実家・親戚宅は全体的に高く特に【濃密】因子と【のびのび】因子が高い。このことから周囲との密な関係性がありながら自身のリラックスもできる傾向が強く示さ

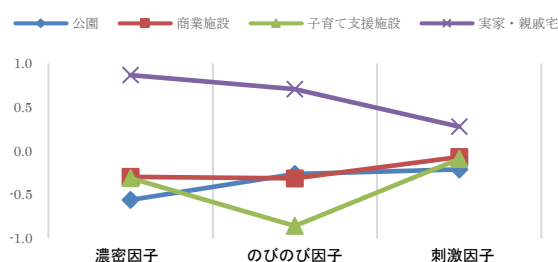


図1 各居場所の因子得点

れた。プライベートな空間であり、両親(義両親)がいることや住み慣れていることが高い心理的安心感を与えていると考えられる。

2 各居場所を選択した親の基本属性

各居場所を選択した親の属性や環境満足度を見るために、棒グラフを作成した(図3~10)。また各居場所と育児状況との関連を分析するために、クロス集計表を作成しカイ二乗検定および残差分析を行った(表1)。

公園を選択した人は30代の男性が多い傾向があり、父親が子どもと過ごす居場所として選ばれやすいと考えられる。また育児状況としては身内の協力やサポートがある人が多い傾向が見られる。商業施設を選択した人は比較的若い人が多く、孤立した育児状況の傾向も見られる。行政支援と子育て環境の満足度は低い傾向がある。さらに行政支援に関しては分からないと答えた人が多い。これらのことから行政サービス等をうまく活用できず孤立して子育てをしている人が居場所とする傾向があると考えられる。子育て支援施設を選択した人は、行政支援と現在住む地域の子育て環境についての満足度が高い傾向がある。これは施設が行政によって計画・運営されてい



図2 居場所感尺度の項目別平均値

るため行政の支援を直接的に受けているからだと推察できる。育児状況については地域の人に支えられている傾向があり、また、子どもと離れて過ごす自由な時間や場所、その必要性

The Place of Parent and Child in the Community and Its Characteristics

Part2: Comparison of "Ibasyo" by "Feeling of Ibasyo" and How to Use

Sotoishi Hiromi, Yabutani Yusuke, Kushita Yui,
Takahashi Saya, Itou nonoka, Arihara chihiro

もあると回答した人が多い傾向から、地域の様々な支援を積極的に活用しながら自分の時間を作っていると推察できる。実家・親戚宅を選択した人は会社員・公務員が多い。育児状況については外とのつながりが少ない傾向がある。仕事が忙しく、地域との関係性を築けていないと推察できる。

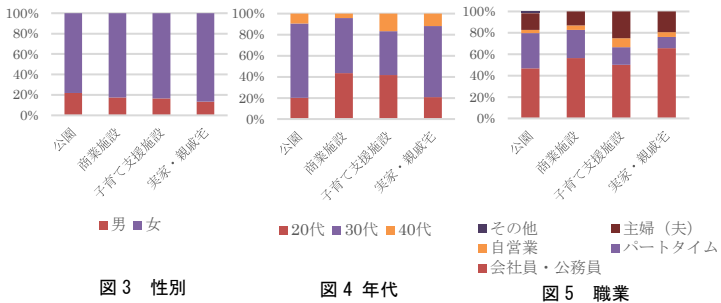


図3 性別 図4 年代 図5 職業

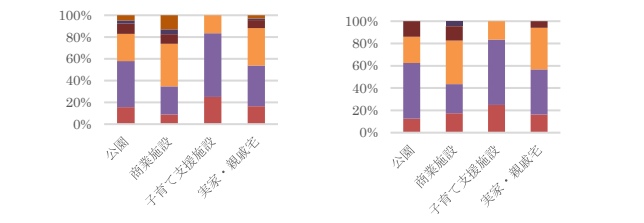


図6 行政支援満足度 図7 子育て環境満足度

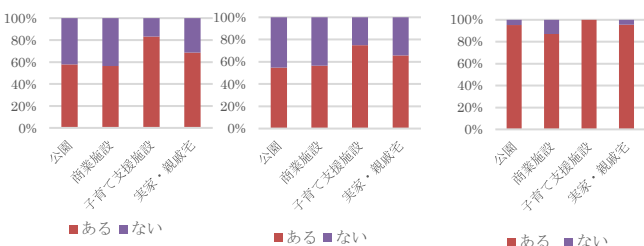


図8 子どもと離れて過ごす自由な時間 図9 子どもと離れて過ごす自由な場所 図10 子どもと離れて過ごす自由な場所の必要性

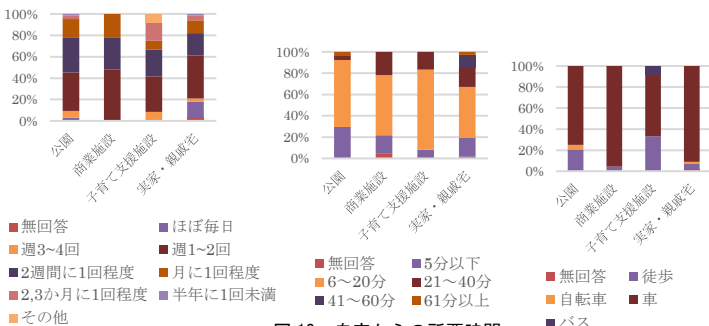


図11 利用頻度 図12 自宅からの所要時間 図13 自宅からの交通手段

3 各居場所の利用形態と過ごし方

各居場所の利用形態を把握するため、各居場所別の利用形態を表す棒グラフを作成した(図11~13)。また、各居場所での過ごし方を把握するため、回答(複数回答可)を場所別にまとめた(図14)。

公園は自宅からの所要時間が短く、移動手段は徒歩が多い傾向がある。前述した居場所感においても「家から近い」の項目の数値が高く、自宅からの距離が近いことは公園が居場所となる要因の1つであると考えられる。過ごし方については子どもを中心とした活動が多い。商業施設では買い物や飲食をすることが多く、親が活動の主体となる傾向がある。そうしたことが前述した刺激を受ける場所という居場所につながっていると考えられる。子育て支援施設では子どもを中心とした過ごし方が多く、さらに新たに出会った人とコミュニケーションを取ることも多い。実家・親戚宅は、自宅からの所要時間が長く交通手段は車が多い傾向から、比較的自宅から距離がある人が多いと考えられる。それでも利用頻度は高く、多少の距離はあっても日常利用する場所として定着していると推察できる。そこでは子どもを中心とした活動、歓談や飲食が多く、親も子ども活動の主体となる。

表1 各居場所の育児状況

育児状況	公園		商業施設		子育て支援施設		実家・親戚宅		状況別計				
	n	p値	n	p値	n	p値	n	p値					
パートナーと協力	54	**	▲	18	ns		11	ns		56	ns		139
両親のサポート	48	*	▲	11	**	▽	10	ns		52	ns		121
子育て仲間と助け合っている	9	+		7	ns		5	ns		27	+		48
地域の人のサポート	6	ns		0	+		6	**	▲	2	*	▽	14
1人でやっている	4	*	▽	19	**	▲	0	+		12	ns		35
その他	11	**	▽	17	ns		3	ns		44	**	▲	75
場所別計	132			72			35			193			432

+p<.10 *p<.05 **p<.01 (▲有意に多い,▽有意に少ない)

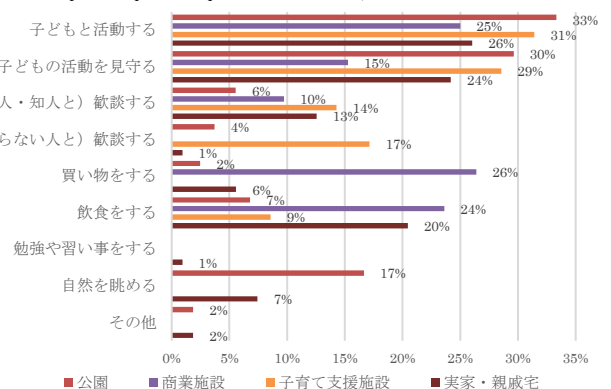


図14 各居場所での過ごし方

- *1 阿部建設株式会社
- *2 富山大学芸術文化学部 講師・博士 (デザイン学)
- *3 富山市役所
- *4 株式会社日総建
- *5 富山大学芸術文化学部 学部生

- *1 Abe Construction Co., Ltd.
- *2 Senior Assist.Prof., Faculty of Art and Design, Univ. of Toyama, Doctor of Design
- *3 City hall of Toyama
- *4 NISSOKEN Architects/Engineers
- *5 Faculty of Art and Design, Univ. of Toyama, Undergraduate